

文政3年 能代沖偽装海難事故

古文書倶楽部

今月のおすすぬ古文書

『色々合冊』三ー下

(AS31212613)

「御回米船於他領破損一件」

「耐震偽装」「米の不正流出」

「企業の粉飾決算」

こうしたニュースを聞きたび

「嘘つきは泥棒のはじまり」と

いう諺は死語になったのか?と

首をひねりたくなります。

果たして江戸時代にこうした

ことはあったのか?と思いつつ

古文書を見ると、ありました、

ありました、とてつもない事件

が:

× × ×

文政三年(一八二〇)八月二

十二日、御用銅二百箇と米四百

【発行】
秋田県公文書館
古文書班
2006.4
第7号

石を積んだ船が大坂へ向けて能代湊から出帆
します。

しかし直後船は風に遭遇。船頭の久左衛門、

沈没を免れるために「やむなく」御用銅九十

箇と米三百九十俵(二百三十四石)を海中に

投棄します。

船は翌二十三日に津軽領深浦(現・青森県

西津軽郡深浦町)に漂着し、船頭と乗組員十

名は能代に戻り、役所へおわびに行くのです

が:実はこれが偽装海難事故だったので。

同業者である能代湊の船問屋清水屋久兵衛

の手代藤助が「積み荷を捨てる程嵐は大きく

なかつた」と証言したことにより藩は捜査に

踏み切り、その結果、船頭の久左衛門が嵐で

積み荷を捨てたことにして、深浦で密売して

いた事実を掴むのです。しかし、犯行グルー

プは密売の代金を回収し逃走したので、秋田

藩は捕縛の協力を弘前藩に依頼します。

ところが弘前藩がこの事件を調べると、密

幕末の秋田藩家老『宇都宮孟綱日記』第1巻 五千円で好評発売中

お申し込みは、秋田活版印刷株式会社まで

(電話) 018188813500)

売に関わつた深浦の町人が意外にも多く、犯
行グループを追うどころではなくなります。

事態は更に拡大します。幕府の老中土井大

炊頭が調査に乗り出してきたのです。秋田産

出の御用銅は大坂銅座に運ばれる統制品で、

これが密売されたことを重く見たのでしよう。

江戸において弘前藩と秋田藩の留守居を呼び

つけ、厳しく問いただしております。

× × ×

『色々合冊』三ー下の「御回米船於他領破

損一件」は、秋田藩江戸留守居が、弘前藩留

守居や幕府老中と事件の解明にあたつてどの

ようなやりとりをしたかが書いてあります。

能代沖で起きた偽装海難事故の捜査が、藩

を越え、次第におおごとになつていく様子は

とても面白いです。

犯人グループと彼らへの処罰は?残念!そこ

まで史料に書いておりませんでした。

(畑中康博)

武家の遺迹(家督)相続

「即刻病死」の謎

『宇都宮孟綱日記』第一巻より

江戸時代の給料にあたる知行や俸禄は、「個人」に与えられるものではなく、「家」に与えられます。基本的には家督を相続する場合、主君である藩主からその許可を受けなければなりません。つまり、藩主から知行や俸禄を改めていただく手続きを経なければなりません。そこで、当主が病気で子が無い場合は、あらかじめ家督相続者を届けなければなりません。しかし家督相続の届け出をし、許可を受ける前に当主が急死した場合は、残念ながら「お家断絶」となり「改易(かいえき)」＝知行没収」になってしまつのが武士社会のルールでした。ところが、このルールには、しっかりと抜け道があったのです。それが「即刻病死」の文言です。当主がたとえ急死したとしても、まだ生きていたことにはしてしまえば良いのです。

古文書倶楽部 第7号 (2006年4月)

『宇都宮孟綱日記』天保十二年(一八四一)九月四日条に、

大御番式番小貫惣兵衛今年六十一歳二
罷成候所、大病二付遺迹願申立候故
可及言上申渡候、嫡子宗吉三十三歳。
四人御扶持御給銀七拾め。即刻病死届
在之候。

(大番士小貫惣兵衛は今年六十一歳になるが、病気のため遺迹願(家督相続)の申し立てがあったので、(藩主に)報告し(許可を受ける)旨申し渡した。嫡子は宗吉三十三歳。四人扶持給銀七拾目。そして即刻病死届があった。)という記事があります。

つまり「病死したので家督相続を認めてください。」ではなく、家督相続の許可を得てから、「即刻病死」を報告しているのです。

これは決してまれなケースではなく、『宇都宮孟綱日記』に頻繁に出ています。

すると…教科書に出てくる歴史上の人物の死亡の日というのは、あまり正確だとは言えない…可能性ががありますね。

(伊藤成孝)

古文書こぼればなし

古文書を読んでいて、どうでもよいことと思つ反面、妙に気になることがあります。次はその一例です。「手疵見申し候得と仰せ付けられ、見申し候由、何も鐘疵にて鉄炮疵これ無き由、胸の疵大きに御座候由」(『御記録処御書物佐藤忠左衛門覚書之内』『国典類抄』軍部一)所収)これは、大坂冬の陣で戦死した澁江内膳政光の死骸を須田伯耆が、佐竹義宣の命令で検視した模様を伝えたものです。これには鉄炮疵がなかったと書かれています。

また「討死聞書」(『佐竹家譜』所収)に、「政光家人ども一所に踏留り是を拒ぐ所に、後藤又兵衛大和川に船を出し、横合に鉄炮を放つ。此玉に中つて鞍の前輪より具足の外を打抜き、玉は胴の中に平たくなりて止る。こらへず馬より落つ。大勢鎗を以てつき止む。木村長門守従兵しるしをあぐ。」(『佐竹家譜』大坂御合戦実録』全(公文書館所蔵)。このように澁江政光の戦死には二通りの記録があります。鉄炮で撃たれて戦死した、と言うのが現在では通説になっているようです。果たして真相はどうでしょうか？

(嵯峨稔雄)